ランチェスター戦略の記事を書いた人達

それは１９５５年（昭和３０年）から始まった。

１．　ランチェスター法則は 1914 年 10 月 2 日に書かれた。

フレデリック・W・ランチェスターは若い頃、自動車のエンジン製作に関していくつもの特許を取ったり、26 歳の頃に航空力学の理論も研究してこれをまとめ、1909 年と 10 年に 2 冊の本を出版している。

ランチェスター氏は 1914 年 7 月 28 日、第一次世界大戦が勃発したことに刺激を受け、飛行機の将来性や地上の戦闘における力関係などを考察し、これをイギリスの技術雑誌に 1914 年 9 月～12 月の 4 カ月に渡って連載した。

法則を考えついたヒントは「空中戦のデータを分析して」ではなく「ピタゴラスの定理」にあることはあまり知られていない。

イギリスではランチェスター法則は全く知られていない。
ところが日本ではランチェスター法則の研究者が多く、本が多数出版されているのは不思議である。

２．　日本には英文の原書が 200 冊以上輸入されていた。

日本でランチェスター法則が最初に紹介されたのは 1916 年である。
筆者の推測では、200 冊以上が輸入されていると思う。
旧日本軍の中にはこの本を読んだ人が何人もおり、山本五十六もその中のひとりで、これを「N2 乗法則」と呼んでいた。

３．　1955 年(昭和 30 年 9 月に再発見

第二次世界大戦が始まる前、アメリカ国防省は日本とドイツとの戦いは避けられないと考え、数学者や物理学者、生物学者などその道の達人を

何人も集め5人～6人で１つのチームを作らせた。
ここからプロジェクトチームの作り方とオペレーションリサーチ（実際的問題解決法、O・R）という、新しい学問を生むきっかけになった。

あるチームのひとりだった、バーナード・クープマンは、ランチェスター法則とゲーム理論の２つを組み合わせ「コープマンの戦略モデル式」を考え出した。

それは、日本に向けるアメリカの国防予算のうち、３分の２を戦略攻撃に、３分の１を戦術攻撃に回すと最も効果的に勝てるというものであった。これに基づいて開発したのがB-29戦略爆撃機であった。

アメリカ政府は戦後、米ソの対立が深刻になった時、戦争で破壊された日本の産業を早く復興させるために「デミング博士」等他の技術者や学者を多数、日本に派遣した。
この中から「オペレーションズ・リサーチ」の考え方が導入されていった。

４．　ランチェスター法則の研究者が続々と誕生

ランチェスター法則の研究で１番古い人は、アメリカで出版されたORの本の翻訳作業にも関係した中原勲平（くんぺい）氏である。
「強者の戦略と弱者の戦略」という表現をしたのは中原師が最初の人のようである。

２番目に古い人は、加藤勝康氏である。
加藤氏は近江製菓の専務をしていた人で、1959年10月に出版された「経営学全集」でオペレーションズ・リサーチの方法を紹介するとともに、ランチェスターの法則を簡単に説明している。

３番目に古い人は、奥村正二氏である。
奥村氏は東京のニコライ堂近くで特許事務所を経営していた人で、1960年に「企業間競争と技術」という本の中で、ランチェスターの法則を説明するとともに、強者の戦略と弱者の戦略について言及している。

４番目に古い人は、林周二氏である。
林周二氏は、東京大学の教授になった人で、1961 年に「日本企業とマーケティング」を出版し、ランチェスターの法則、そして強者の戦略と弱者の戦略について説明している。
そして、「競争条件が有利な会社と不利な会社とでは経営のやり方を変えるべきだ」と結論づけている。

５番目に古い人は、池田一貞氏である。
池田氏は九州工芸大学の教授をしていた人で、1965 年に出版された「現代マスコミ統計調査論」の中でランチェスターの法則について説明している。

６番目に古い人は、斧田大公房（おのだだいこうぼう）氏である。
斧田氏は 1969 年 3 月 6 日の日本経済新聞に、1962 年から田岡信夫と共に１年かけて共同で導き出した、73.9%,41.7%,26.1%という「市場占有率の３大数値」を説明し、同時に市場占有率の重要性について説明している。この３大数値は、アメリカのマーケティング・コンサルタントも気付かなかった、日本独自のもので高く評価された。

７番目に古い人は、宮川公男である。
宮川氏は一橋大学の教授をしていた人で 1969 年に「OR 入門」という題名で日本経済新聞社から出版し、5 万冊以上売れているようである。
この中でランチェスター法則が OR にどのように応用されたかを紹介している。

８番目に古い人は、田岡信夫である。
田岡氏は 1971 年にビジネス社から「競争市場の販売予測」の中で、斧田大公房氏と共同で考え出した「市場占有率の３大数値」を詳しく説明している。田岡氏は 1972 年に「ランチェスター戦略入門」を出版し、5 冊シリーズになる出版を重ね大ベストセラーになり、ランチェスター戦略の第２次ブームが起きた。田岡氏は 57 歳の若さで亡くなったが、生前、ランチェスター戦略について 20 冊くらい出版しており、ランチェスター戦略では「超・独占的な強者」になっていた。

９番目に古い人は市原樟夫（いちはらくすお）氏である。
市原市は高知県の中小企業指導所に勤務中に田岡信夫氏の著書を読み、

市場占有率の３大数値を応用し,54.6%,30.8%,19.3%,15.1%,10.9%,6.8%,2.8%の中間的な目標数値を同指導所の中小企業研究の「特別号」で発表した。

１０番目に古い人は船井幸雄氏である。
船井氏は 1974 年に出版した「船井正攻法」で田岡信夫氏と斧田大公房氏が導き出した市場占有率の「３大数値」を、更に市原氏が考えた 26%以下の数値を紹介している。その後、これらの数値は船井総研内では船井理論にしているそうである。

１１番目に古い人は竹田陽一である。
筆者は 1983 年に「利益時間戦略」を産能大出版部から出版した。その後、「ランチェスター・弱者必勝の戦略」を出版し合計８万部売れた。

１２番目は矢野新一氏である。
矢野氏は田岡信夫の会社でインストラクターをしていた人で 1986 年に「ランチェスター地域 No1 戦略」を出版している。その後、マンガによるランチェスター戦略の本を出したことで、若い年代層にランチェスター戦略が知られるきっかけを作った。

５．　超・強者の田岡信夫がなくなる

６．　日本で説明されている誤りについて

７．　弱者は物的証拠を手に入れないとサルマネの記事になる

筆者は、ランチェスター戦略の研究で、「英文の原書」、「伝記の原書」他を翻訳して確認している。

今後もランチェスターの法則を応用して本を出版する人が何人も出てくるであろうが、最も大事なところは原書で確かめるばかりか、基本となる大事な考え方や文章を転載するときは出所を明らかにすべきで、しかも 10 行以上を掲載するときは本人の許可を得るべきであろう。

【文責：福島清隆　ランチェスター経営㈱竹田陽一の著書から要約転載】